

十文字学園女子大学人間生活学部紀要第5巻 2007年

「行動観察法」の授業におけるデジタル動画データを用いた 教育プログラム開発のための研究

Developing a Training Program of Behavioral Observation Using Digital Films

星 三和子
Miwako HOSHI

岡村 佳子
Yoshiko OKAMURA

鵜木 恵子
Keiko UNOKI

要 旨

【目的】本学人間発達心理学科における「行動観察法」習得を目的として授業において、多数の学生が確実に習得を可能にするため、パソコン上でDVD画像を使った授業科目プログラムの開発を試み、これを用いた個別学習授業の有用性と問題を明らかにする。

【方法】授業の到達目標は①客観的な観察、②行動から人の内面の根拠に基づいた解釈、③観察の視点の複合化、④記録方法、分析方法の習得、⑤現場での行動観察への応用、である。学習課題を6つ用意し、観察対象については映像（静止画・動画）、人数（一人・複数）、視点（行動・関係）、観察方法については観察回数（1回、繰り返し）、記録の方法（事象見本法、時間見本法）、信頼性検討（2人、グループ）の要素を入れた。課題はDVDを通してパソコンモニターから提示され、受講生は観察、記録、レポート作成を行った。

【結果】観察記録、レポート、質問紙調査回答から、次のことが習得された。①より短時間での観察記録。②全体状況、時間に伴う進行等の記録化。③行動の記述の明確化。④行動の変化点など要所の記述。難しい点としては、行動から意図を推測することと発達的な知識の利用であった。受講者自身が学んだと感じているのは、客観的な観察の意義、外的な行動から心的な状態の推測、観察の視点の重要性、発達段階への考慮等であった。一方で行動の読み取りの難しさも指摘された。教材およびパソコンを使ったことについては適切という回答であった。

【結論】本授業方法はおおむね効果があると判断された。改良すべきことはあるものの、現場観察に向けた教授方法としては有用であり、今後どのように発展させていくかが課題といえる。

十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科
Department of Human Developmental Psychology

Key words: 行動観察法 個別学習 教育プログラム 動画、デジタル機器

I. 授業プログラム開発の目的

1. はじめに

心理学において行動観察法は主要な研究方法の一つであり、心理学を学ぶ受講生にとって必ず習得すべき基礎的手法である。ことに実験法や調査法が難しい乳幼児の研究においては、行動観察の重要性は大きい。

発達心理学の分野では、生態学的なアプローチがより重視されるようになり、行動観察研究の重要性の認識が高まって、手法も発展した。このことの大きな理由として、ビデオ撮影機器と記録メディアの小型化・廉価化によって、誰もが被観察者への心理的負担を少なくして撮影することができるようになったという技術的な進歩がある。かつては直接観察こそが観察であり、機器は補充的な役割しかもたないと言われたが、現在ではビデオ映像の分析やビデオ・ドキュメンテーションは発達心理学の分野では欠かせない手法である。

ひるがえってみれば、「行動観察」は多くの分野で必要な基礎的な技能である。たとえば教師が授業や生徒の観察をする、福祉分野での観察他、およそ人に接する職業人は、相手の行動を主観的に解釈するのではなく、客観的あるいは間主観的で説得力をもった観察をしなければならない。

ここでの客観的な行動観察とは、古典的行動主義の心理学でいうような、外から見える行動だけを観察するという意味では扱われない。行動は内面の表現である。つまり、意図、意欲、感情他の内的な状態は、なんらかの形で行動に表れる。それを仔細に観察し、憶測や想像でない、行動から納得できる意味を推測し、解釈を行うことという意味の行動観察である。したがって「客観的な行動観察」とは、客観的に見える行動だけを扱う観察という意味ではなく、客観的に見える行動から、誰にとっても合理的という客観性の高い解釈をするということである。

2. 大学の行動観察法の授業の問題と授業プログラム開発の目的

現在の大学の心理学教育課程における行動観察法の授業に関しては、2つの問題点が挙げられる。

第一に、従来の心理学の観察法の教科書の多くは、「事象見本法」「時間見本法」といった観察データの収集方法、記録法、統計処理法等の習得にほとんどのページを割いている。「何を見るか」「どのように見るか」という、より基本的な点についてはごく簡単にしか触れられていない。人の行動に、説得力のある意味づけをする能力をどうつけるか、ということとはほとんど問題にされていない。しかし「行動観察法」の授業でまず受講生が習得しなければならないのは、このように人の行動を見る見方、行動を解釈する能力を身につけることであろう。

第二に、多人数の授業で行動観察を一人一人が確実に習得するにはどうすればよいか、ということの具体的な方策が考えられていない。従来最も一般的なのは、実際の場で受講生がそれぞれ観察をしてきて報告する、あるいは一定の場所に行って観察し検討しあうということである。

第一の点を改善するには、受講生が行動を解釈したことに授業担当者がフィードバックを返し、受講生が再度行動を見て修正するという双方向の過程をとれる授業が望ましい。そのためには行動を繰り返し見られるという点で、映像が有効である。第二の点については、多数の受講生のいる授業であっても、受講生が個別に観察し、その解釈に合わせて授業担当者がフィードバックできるような教室環境にあることが望ましい。

この2点を改善するために、DVD機能が備わったパソコン上でデジタル動画データを用いる方法が有効ではないか、と筆者たちは考えた。それは、以下のような利点があるからである。

- ① 受講生は何度も繰り返し映像を見て記録したりチェックすることができ、遡ったり止めたりすることも容易である。

- ② 受講生は各自が自分のペースで観察を進めることができる。
- ③ 教室の大スクリーンにプロジェクターで映像を映す場合と比べると、受講生は近くに映像を見ることでより映像に集中できる。
- ④ 受講生全員が同じ映像についての観察を行うので、授業担当者は個々の受講生への助言、全体の解説などが行いやすい。
- ⑤ 同じ観察対象なので、受講生は互いの記録を比較したり話しあうことができる。
そこで、パソコン上でデジタル動画データを使う授業形式の開発を試みた。

II. 「行動観察法実習」授業プログラム

1. 「行動観察法実習」の授業のカリキュラム上の位置づけと受講生の概要

本研究の対象である十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科の「行動観察法実習」の授業は、人間発達心理学科2～3年生の選択必修科目である。これは学科全体のカリキュラムのなかでは、1年次での「心理学基礎実験」(必修)に続き、3年次の演習および卒業研究につながる位置にある。受講生は、1年次の「心理学基礎実験」の授業で、すでに時間見本法による行動観察を行い、観察という事態を経験している。この一連のカリキュラムのなかでより組織的に観察法を習得するということがこの授業の趣旨である。本研究は2005年度後期および2006年後期(いずれも9月後半から1月初旬)の授業において行われた。受講生は2005年度は当初38名、最終レポート提出者は34名であった。2006年度は当初43名、最終レポート提出者が41名であった。

2. 授業の到達目標

- ① 客観的な観察とは何かについて理解する。
- ② 人の行動は内面の表れであるとの前提により、行動から内面を推測し解釈する方法を理解する。想像や憶測ではない根拠のある推測

ということを知得する。

- ③ 観察の視点を養う。いろいろな見方があることを学ぶ。
- ④ 時間見本法、事象見本法の記録方法および整理・分析方法を知得する。
- ⑤ 記録を分析し、レポートにまとめる技能を知得する。
- ⑥ 映像の観察で身につけた力をもとに、実際の現場で確かな目をもった行動観察ができるようにする。

3. 授業プログラムの構成

15回の授業は6つの課題から構成された。各課題の観察対象、観察の目標、記録方法は表1の通りである。

観察対象に関しては、静止画、動画、実際場面を設定した。動画データの中の人物に関しては、課題2と3では一人の行動を観察し、課題4、5、6では複数の人の関係を観察することを目的とした。

課題1と課題3は公にされている写真および映像を用いた。課題2、4、6は保育園の乳幼児の映像(筆者の一人が撮影)を教材にした。乳幼児の映像を用いた理由は、①映像観察が最終的には課題5の幼稚園の実際の観察につながる訓練という位置づけであること、②乳幼児は大人より内面が行動に表れやすいこと、③観察時に発言を書き起こす作業を除けること、である。記録方法については、事象見本法、時間見本法、自由記述法を用いた。

4. 授業の概要

(1) 教室の設備環境および教材

授業は、DVD機能をもったパソコンが受講生の数以上に備えられた教室において行われた。また教室には、パソコンとは別に、2人に1台の割でモニターが備えられており、授業担当者が担当者用のパソコンから動画データを送るこ

表1. 授業プログラムの構成

	観 察 対 象		実 習 の 目 標	記 録 方 法
課題1	静止画	静物画、二人の人物写真	<ul style="list-style-type: none"> ・観察の体験 ・人を観察することの物を見ることとの違い ・人（受講生）によって見方が異なることの体験 	自由記述法
課題2	動画1	一人の子どもの水遊び2005年度：4歳児 2006年度：1歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・動画を観察記録すること ・客観的な観察と記述 ・行為から意図を解釈することの意味・観察の視点の置き方 	自由記述法 ↓ 事象見本法
課題3	動画2	落語における動作と語り	<ul style="list-style-type: none"> ・時間見本法を習得する（手の動きのチェック） ・語りと全体の動きを事象見本法で記録、カテゴリ化 ・手の動きとストーリーの関係を考察する 	時間見本法 事象見本法
課題4	動画3	4人の1歳児の相互作用	<ul style="list-style-type: none"> ・人と人の関係を観察し、カテゴリ化、図示 ・二人の観察記録の一致度を見ることで観察の信頼性について考察する 	事象見本法
課題5	現場	幼稚園での自由遊び場面での子どもたちの行動	<ul style="list-style-type: none"> ・観察計画立案、予備観察、対象児の選定、撮影、記録、分析、発表と、一連の観察をグループで自主的に行う ・1回限りの現場の観察の面白さと難しさを体験する 	時間見本法 事象見本法
課題6	動画4	4歳児二人の遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの実習を踏まえた習熟度を測る（自由記述法） ・最終レポートを作成する 	自由記述法 ↓ 事象見本法

とができる。これにより、動画データを見せる時間や回数をコントロールしたり、授業担当者が画像データを見せながら説明することができる。

課題2, 3, 4, 6の映像は一枚のDVDに収録されて、毎回授業時に各受講生に配布され、終了時に回収された。その他、教示の文書、記録用紙、レポート用紙、観察後の解説の文書が配布された。

(2) 授業の概要と展開

課題1：静止画の観察（1週目）

モニターに映しだされた写真を一定時間見て、観察したことを列挙した。①静物が机の上にある写真、②二人の人物の写真の順に記録する。その後受講生全員が記録したことを発表し、観察したことの多様性について討論した。

課題2：一人の子どもの映像の観察（2-3週目）

一人の子どもが水遊びをしている場面のDVDを使用した。2005年度は子どもが水道の蛇口で手に水を受けている場面であったが、2年目は1歳児が保育園の園庭でペットボトルに

水を入れようとする映像に差し換えた。観察の方法は、①1回目は授業担当者がモニターに映像を流した。受講生は記録をせずに観察した。②2回目には、同じくモニターに流れる映像の子どもについて受講生は観察しながら自由記述で記録した。③3回目には各受講生にDVDが配布され、繰り返し自分のペースで見て、事象見本法により記録用紙に記述した。記録用紙を整理してレポートを作成した。

課題3：落語の語りの映像の観察（4-6週目）

配布されたDVDに収録された、落語家が語る映像を受講生は観察し、記録用紙に記録した。記録用紙は落語家の右手左手の動きについてのチェックリスト、ストーリーの記述をする部分、手の動きの意味をカテゴリ化して記入する部分に分かれているものであった。各受講生は自分のペースで映像を観察し、記録用紙に記入した。

課題4：4人の子どもの映像の観察（7-9週目）

DVDが配布され、受講生は1歳児4人が行動で意思を伝え合い関係しあう映像を観察した。まず、受講生は自分のペースで映像を繰り返し

見て、記録用紙に記入した。記録完成後、二人ペアになって、互いに相手との観察の一致度を確認し、二人で再度映像を見ながら一致しなかったところを修正して、二人で一つの記録を作成した。

課題5：幼稚園の自由遊び場面の観察（10-14週目）

ここまで学んだことを踏まえて、実際に子どもが遊んでいる場面をグループ（4人一組）で観察した。①予備観察で現場の状況を予め把握し見取り図を書いた。②本観察で、まずターゲット児および観察のテーマを決める、あらかじめ決めた役割に従って観察記録とビデオ撮影を行う、③観察後に記録の整理と分析を行う、④発表会で分析結果を発表し、受講生相互に意見を交換した。

課題6：4歳児の遊び場面の映像の観察（15週目）

課題2と同じ方法で行った。まず授業担当者が映像をモニターに流し、受講生は1回目に観察のみを行い、2回目に自由記述により記録した。このあとDVDを自分のペースで見て観察記録を作成する期末レポート課題が課された。各回の討論とレポート：授業担当者は受講生が記録する間、個別に指導を行うとともに、全員に質問を投げかけて討論を行った。各課題に対して受講生はレポートを提出するが、この結果についてレポート提出後の授業でフィードバックと講評、討論を行った。この過程で受講生は授業担当者の観察への見方のみならず、他の受講生の観察結果も知る機会が頻繁にあった。

III. 授業結果の分析と考察

1. 観察記録の分析による、観察技術の習得に関する検討

2年間合計81名の受講生が行った観察結果資料をもとに、観察の技術がどれくらい習得できたかに関する分析を行った。原則は2年間のデー

タの合計を資料とする。なお、1年目（2005年度）のデータ収集の不備により、2年目（2006年度）の資料だけを扱った部分がある。

(1) 初回の観察と最終回の観察の比較

授業によって観察の目はどれだけ養われたのか。映像観察の初回である課題2（映像の長さは7分58秒）と、3ヶ月の後の課題6（11分48秒）の自由記述による観察記録を比較した（2年目のデータのみ）。

課題2、課題6とも同じ手続きで観察を行った。1回目はモニターに流された動画を見て、2回目に観察後5分間に観察したことを自由に記録した。この観察記録の比較を行った。その結果を表2に示す。観察6の映像の方が観察2の映像より複雑な事態であったため、観察のしやすさは等質とはいえないので、単純な比較はできないが、実習経験を経ての変化を把握するために比較した。

表2から、観察法の学習経験初回に比べて、最終回には次のような向上が見られることが示された。

- * 映像1分当りの観察記録の文数が多くなり、短い時間に多くの観察をするようになった（②③）。
- * 時間の流れに添って観察できるようになった（⑥⑦）。
- * 場面展開のなかで何が重要かを理解し、その行動を見逃さなくなった（⑨⑩）。
- * 全体の場面展開を把握しながら、個々の行動の意味を理解して記録するようになった（⑧⑩）。

(2) 期末レポートの分析による習得度の検討

最終の期末レポートの課題は、課題6の4歳児2人の共同遊びの場面（11分48秒）の映像のうち、8分30秒分について、事象見本法による「観察記録」を所定の記録用紙上に作り、その

後二人の遊びとやりとりの展開について「考察」を書くことであった。記録用紙は30秒を1単位（これを1コマとする）として、一人の子どもにつき17コマ、二人で34コマ分を記録するようになっていた。

提出されたレポート数は2005年度29人分、2006年度42人分であり、このうち2006年の記録不備の1名分を除く計70人分のレポートを分析

対象とした。

A. 期末レポートの「観察記録」の分析
基本的な観察技術の習得に関して、半年の授業で到達目標にどれくらい達したかについて、期末レポートの観察記録の分析を行った。基礎的な事柄の習得達成基準を下記のように設定し、この基準をクリアした人数の%を表3に示した。以上の結果から次のことが明らかになった。

表2. 観察初回と最終回の観察自由記述の比較

	初回（課題2）	最終回（課題6）
①記録の文の総数	398	826
②一人当たり平均文数	9.26	21.7
③映像1分当りの文数	1.15	1.81
④最大値、最小値、	MAX=19,MIN=4	MAX=47,MIN=8
⑤SD	SD=3.40	SD=8.23
⑥進行に添って記録した人	19人（44.1%）	34人（89.5%）
⑦進行に添わず、見たことのランダムな羅列	24人（55.8%）	4人（10.5%）
⑧全体状況、成り行き、関係の記録をした人	2人（4.7%）	15人（39.5%）
⑨重要な行動の記録なし	18人（41.9%）	0人
⑩全体の場面のテーマと関係ないことの記録	3人（7.0%）	1人（2.6%）

実人数：初回43、最終回38

表3. 期末レポートの観察記録から見た習熟度

達成基準	2005年度	2006年度	合計
①行動の重要な点や変化の時点が記録されている	93.1	95.2	94.3
②記述が粗い（1コマに行動一つ以下のところが3コマ以上） ことがない	75.9	80.5	78.6
③無関係な行動や行動の記述が細かすぎて、全体の展開がわからないところが3コマ以下である	89.7	97.5	94.3
④行為の大雑把な記述（例：遊ぶ、誘う、従う、他のことをする、会話する、準備する）等、具体的な行為がわからないところが2箇所以下である	58.6	83.0	72.9
⑤ことばの記述だけで行動の記述がないところが3コマ以下である	93.1	87.8	90.0
⑥行動のみでことばの記述がないところが3コマ以下である	48.3	83.0	68.6
⑦二人の行動がそれぞれのコマに分けられ、混同がない	82.8	95.2	90.0
⑧2人の行動の順序あるいは相手とのやりとり関係の記述がある	69.0	83.0	77.2

人数に対する%：人数 2005年度29、2006年度41、合計70

- * 観察すべき要点は押さえられている (①③)
- * 行動をどの程度詳しく書くべきか、どのようなことばで表現するべきかの選択は難しいようである (②④)。これは短い期間での完全な習得は難しく、今後も経験を積みながら習得できることであろう。
- * 行動に着目したために、言語記録 (ことばの逐語記録) については要点だけ書かれ、両方を同時に記録するのはやや難しかったようである (⑥)。
- * 二人の行動の関係や順序を記録するための工夫がより必要である (⑧)。

B. 期末レポートの「考察」の分析

期末レポートには、二人のやりとりや遊びの展開を中心に考察するように指示されていた。ここでは、どのようなテーマについて考察をしたかを分類し、表4に示した。なお考察の内容や質についてはここでは問わない。

表4の結果から言えることはまず、ほとんどの受講生が観察した行動とカテゴリ分類に基づいた分析的な考察をしているということである(①)。また観察対象の性格を判断する等の主観的に陥りやすい観察は、前半の授業では見られがちだったが、期末レポートでは少なくなっている(④)。観察した客観的な事実添って考察することは習得されたといえよう。しかし、遊びの内容については、記録されていたにもかかわらず、考察は半数程度に留まっていた(③)。

2. 行動観察法実習についてのアンケート調査の分析

期末レポートとともに、行動観察実習の授業についてのアンケート調査を行った。2005年度の回答人数は30人、2006年度は40人、計70人であった。

(1) 授業を受けたことにより得たこと、変化したこと

A. 授業から何を得たか

調査の最初の質問で、「授業から何を学び何を得たと思うか」について、自由記述による回答を求めた。その回答を分類した結果を表5に示す。

総じていえば、客観的に見ることの重要性を認識した、観察の視点ということに注意を払うようになった、行動をよく観察することでその意味や発達段階といったことに気づくようになった、という点が注目される。「その他」の回答は「人の細かい動きに注目できるようになった」「ありのままを観察することの大切さと難しさがわかった」「人の行動は一人一人違うから楽しい」「1~2歳の子どもでも考えて行動している」「被観察者に影響を与えないで観察するのは難しい」「同じことを観察しても人によって見方が違うのが面白い」であった。なお授業年度によって回答の差が大きいのは、授業運営や授業担当者のフィードバックに年度によってばらつきがあったためと思われ、指導の改善を要するものである。

表4. 期末レポートの考察点

	2005年度	2006年度	合計
①模倣等のカテゴリ分析から二人のやりとりの展開を考察	96.5	87.8	91.4
②全体として二人の関係をおおまかに考察	44.8	73.1	61.4
③遊びの展開を考察	58.7	31.6	42.8
④子どもの性格や個性を行動から推測	17.2	26.8	23.0

実人数に対する%：人数 (延べ回答数) 2005年度29 (63)、2006年度41 (90)、合計70 (153)。

B. 授業を受けたことによる自分のなかの変化

「授業を受けたことで自分にどんな変化があったか」について、10項目から選択する方法（複数選択可）によって質問した。その結果を表6に示す。

選択肢の10項目のなかでは、発達に対する興味が深まった、客観的に観察することが理解できた、という回答が多かった。また行動を詳細に見る、行動のみならず関係を見ることができ

るようになった等、観察の視点に注目した回答が次に多かった。これらに比べると、記録や分析方法に関することについては相対的に関心は低かったと言えよう。

以上、自由記述および選択肢質問への回答結果から、主観的な印象や判断でなく客観的な観察が重要だということ、客観的な観察とはそれぞれの人の行動を仔細に見ることから出発すること、人の内面や人と人の関係を行動から推測することができるということ等について、受講

表5. 行動観察の授業から何を学び何を得たと思うか

	2005年度	2006年度	合計
主観的でなく客観的に見ることが大事ということ	40.0	10.0	22.9
身振りや行動から人の内面や意図に気づくようになった	23.3	22.6	22.9
時間見本法などの観察の手法とポイント	10.0	27.5	20.0
何気なく行動していると思っている行動にも意味があること	10.0	27.5	20.0
発達段階やその人の情報等いろいろなことも考慮して観察すべき	20.0	12.5	15.8
何気なく見ると注意深く観察するのでは意味が違う	0	17.5	10.0
どんな部分を注目すればよいかの視点が大切なことがわかった	10.0	5.0	7.1
人への理解力が高まった	0	7.6	4.3
その他	10.0	7.6	10.0

自由記述。実人数に対する%：人数（延べ回答数）：2005年度30（37）、2006年度40（55）、合計70（92）。

表6. 授業を受けたことで自分にどんな変化があったか

選択肢項目	2005年度	2006年度	合計
子どもの発達について興味が深まった	76.6	72.6	74.3
客観的に観察するということが理解できた	70.0	72.6	71.5
人の行動の細かいところに注目できるようになった	53.2	57.5	55.7
人と人の関係について見ることができるようになった	46.6	60.0	55.6
人の行動の意味の理解が深まった	33.4	67.3	54.2
多面的に人を見ることができるようになった	43.1	44.9	44.4
記録をつけることの意味がわかった	40.0	32.7	35.5
グラフや表を作ることの意味がわかった	33.4	37.5	35.5
心理学での行動観察の意味がわかった	26.8	30.2	28.5
論文やレポートで行動観察法を使う意味がわかった	16.7	12.7	14.5

複数回答可 実回答数に対する%：実回答数（延べ回答数）2005年度30（132）、2006年度40（195）、合計70（327）。

生にはある程度の認識ができたのではないだろうか。

(2) 観察で興味深かったこと

「観察のどんな点に興味を持ったか」について自由記述により回答を求めた。回答を分類した結果を表7に示す。

表7の結果は、観察対象に関することと、観察の視点に関することに二分された。観察対象については、幼稚園観察で実際に自分たちでターゲット児の決定、観察、撮影、記録、分析を行っ

たことが最も興味をもたれた。また動画データ観察から現場観察に至るまでの観察を通して、日常に応用できる観察のおもしろさを見出したことは重要ではないだろうか。また観察の視点については、(1)の「実習で得たこと」と同様に、行動から個性、内面、関係、発達を見ることが興味深かったということが挙げられた。

(3) 観察で難しかったこと

どんなところが難しかったか、という質問への自由記述回答を分類した結果を表8に示す。

表7. 観察で興味深かったこと、おもしろかったこと

	2005年度	2006年度	合計
幼稚園の現場の観察	28.6	36.4	32.9
子どもの観察	5.7	18.2	12.7
落語(手振り)	11.4	9.1	10.1
行動を多面的にみると人の性格や特徴がわかる、発見がある	8.6	11.4	10.1
子どもは感情が行動にでる、行動でコミュニケーションする	17.1	2.3	8.9
子ども同士のやりとりや力関係	0	13.6	7.6
子どもの行動から発達を捉えられたこと	14.3	2.3	7.6
人が普段何気なくしていることが意味をもつことがわかった	2.9	2.3	2.5
同じものを見ても人によって見方が違うこと	2.9	2.3	2.5
観察を習得するプロセス	2.9	2.3	2.5
無回答	5.7	0	2.5

自由記述、回答数の%：延べ回答数2005年度35、2006年度44、合計79.

表8. 観察で難しかったことは何か

	2005年度	2006年度	合計
行動の解釈、意図の読み取り	11.5	29.3	22.4
見たことをどのようにことばで表現するか	11.5	12.2	11.9
いろいろな角度から見ること、どこに注目してよいか	15.4	4.9	9.0
発達段階を考慮して観察すること	7.7	9.8	9.0
客観的に観察すること	11.5	0	4.5
グラフで表すこと、結果のまとめ方、レポート	26.9	12.2	17.9
時間見本法、カテゴリ化等記録方法	11.5	17.1	14.9
ビデオ撮影、現場での行動の判断と記録	3.8	14.6	10.4

自由記述、延べ回答数に対する%：延べ回答数2005年度26、2006年度41、合計67.

観察自体については、観察の視点、言語表現、行動の解釈の難しさが挙げられた。行動から意図を読み取るということは、おもしろく大事だと認識はするが、同時に難しくまだ習熟を要することなのである。また記録について、現場での記録、カテゴリ化などの分類と分析、まとめ方等が挙げられたが、これらも指導と習熟をなお要することである。

以上、学んだことも難しかったことも、①主観的な見方でなく客観的な観察、②観察の視点をどうもつか、③どのような表現で記録するか。④行動をどう解釈するか。の4点については共通であった。

(4) 教材についての検討

課題1~5についての感想を求めたが、これに対する自由記述の回答から、課題の適切性について考察する。

①課題1(静止画)：最初に静止画を使ったことについては、「導入としてわかりやすかった」、「受講生一人一人が自分の観察した事項を述べていったが、人によって注視点や解釈が異なり、多様な見方をすることがわかって興味深かった」という感想があった。「物の観察では事実を記述するが、人物については『二人は夫婦だと思う』のような主観的な印象や推測になりがちだということを実感した」という感想もあった。物の写真と人物の写真を対照させて見たことが、客観的な観察という意味を理解しやすくなったのではないか、と思われる。

②課題2(一人の動画)：最初の動画として、一人の子どもの遊び場面を使用した。2006年度の水で遊ぶ子どもの映像は、行動がわかりやすく、また一人の行動にのみ注目できたために、行動から意図を読みとるのが興味深かったという評価が多かった。この意味で、一人場面を行動観察の最初に使ったことは適切であったといえよう。

③課題3(落語)：人物の動きとことばから、時間見本法と事象見本法の観察をした落語の映像は、興味深かったという人と難しかったという人に分かれた。興味深かったという人のなかには、「語りを手の動きがわかりやすくしていることがわかっておもしろかった」、「日ごろ何気なく見ている身振りに意味を発見した」という感想があった。難しかったと言う人のなかでは、落語が始めてで言葉が難しく理解できない、視覚的な観察対象と聴覚的な観察対象を関係させることが難しい、カテゴリ化が難しい等であった。この教材には多くの要素を盛り込みすぎた感はいなめない。また背景がないということが特に観察をやさしくするとは言えなかった。要素を減らして視覚材料だけにする、記録方法も一つにする等改良が必要である。

④課題4(4人の関係)：個々人の行動より、人と人の関係を見ることに主眼を置いた。この頃には、受講生はかなり慣れてきて、映像から人物の関係を引き出すことができるようになった。4人の子どもの関係も興味をもって見ることができた。「行動に子どもの個性が表れているのがおもしろかった」という感想があった。言葉がない段階の子どもで行動にのみ注目できたことも観察を容易にしたと思われる。

⑤課題5(幼稚園の現場)：実地の観察は最も多くの受講生が興味深かったと回答した課題であった。興味深かったことの第一は、自分たちで計画しターゲット児を決めて観察し、分析発表まで行ったことであった。ここに至るまでにある程度の技能を修得したからこそ、このようなことができたのであろう。しかしまた難しい課題でもあった。何が起こるか予想できない状況での観察は、どこに視点を当てどんな表現で記録すべきかについてのすばやい判断が求められる。予備観察を含め2回だけの実地観察で半期が終わったので、上級学年でのさらなる習熟の機会が望まれる。

(5) パソコンを使ったことに関する評価

授業は本学のパソコン演習室の一つで行われた。2005年度、2006年度とも同じ教室であった。アンケートでは、DVD およびパソコンの操作等教室環境について質問した。その結果を表9に示す。受講生には概ね好評であり、機械の不具合以外の点ではとくに問題は見出せなかった。

3. 授業運営面からの考察

(1) 授業担当者からのフィードバックと受講生相互の情報交換

授業担当者が授業運営の面で目指したことの一つに、受講生が自分の観察記録を他者の観察と比較照合することで、観察の新しい見方を得たり見方を広げるという体験をすることがあった。これには二つの方法をとった。一つは受講生の観察記録に対して授業担当者が自分の見方をフィードバックすることであり、もう一つは受講生同士が二人あるいは全員で観察記録を共有したり交換することであった。

A. フィードバックによる指導に関して

観察対象のどこに注目するかに注意を払うことで、よりよい事態の理解ができるということについて担当者が行ったフィードバックの一例を示す。2006年度の課題2で、子どもがペットボトルの水を別のペットボトルに移し変えようとするもののボトルが倒れてなかなかうまくいかない場面がある。ここで多くの受講生が次の

ように記述した。「黒いペットボトルを持ち上げて置き、次に赤いペットボトルを持って地面に置いた。代わる代わる持っては置いた。赤いペットボトルを取って、黒いペットボトルに入れようとした」。これでは単に二つのボトルのどちらかを選んでいるという情報しか含まない。実は赤いボトルは小さくて子どもが手で持てる大きさと重さだが、黒いボトルは大きい上に重いので子どもは両手でも保持することが難しい。ボトルを一つずつ持ち上げては下ろす行為は、重く持てないボトルは下ろし、最後に小さく軽いボトルを掴む過程だったのである。したがって観察すべきは「小さいボトルを取って地面に立てた大きくて重いボトルに水を入れようとしている」ことなのである。このように同じ行動を見ていても注目点を変えると行動の意味がより解釈できるようになる。観察のあとにこのようなフィードバックを行うことで、受講生は自分の観察の視点を修正し、行動の意味を理解することができた。

B. 受講生が観察記録を共有することによって観察の多様性を知ること

授業のなかで、それぞれが観察したことを発表しあった。これは、同じことを見ていても受講生の発表することがそれぞれ違い、自分の観察は絶対ではないことや多様な見方が可能なことを実感する機会になった。例えば、初回の授業である課題1では人物写真を観察したことを

表9. パソコンを使ったことについての評価

	はい	いいえ	無回答
DVD 映像はわかりやすかった	77.0	1.4	2.9
画面の大きさはよかった	90.0	8.6	1.4
操作の仕方は易しかった	85.7	19.2	1.4
パソコンを自分のベースで操作したのはよかった	97.1	1.4	1.4
機械の不具合は、なかった。	27.1	70.0	2.9
パソコンを使った実習はよかった	95.7	2.9	1.4

単一選択。人数に対する%：回答総数70（2年分の合計）。

一人ずつ発表した。その多様さは受講生たち自身が驚きの声を挙げるほどであった。一枚の写真について実にたくさん観察できることがある、という経験は、その後の観察の基礎になったのではないだろうか。また二人一組になって互いの観察記録をつきあわせ、映像と照合しながら二人で一つの記録を作るという作業の過程で、自分の見方をどう修正するかを具体的に検討できたと思われる。

(2) 映像の個人情報保護法との関係

映像は個人情報保護法にのっとって保護されねばならず、扱いには注意が必要である。映像の選択に当たっては、映像の登場人物、特に被観察者となった人の同意をとるか、あるいは個人が特定できないということが必要であった。今回は試行錯誤の後、筆者が10年前に撮影したフィルムのなかから選択した。それは現在この子どもたちは成長し当時の映像から現在を特定することは難しいと判断したためである。事実、映像から被観察者を特定されたことはなかったが、今後はあらかじめ観察授業のために同意を得られた映像を使うことが望ましいであろう。また映像の扱いについては、個人情報の管理の重要性が受講生に充分には伝わらず、自由にDVDを持ち帰れない等の不満が出たことがあった。個人情報保護の意味の理解を徹底する努力が必要である。

IV. 結論

以上のように、今回試みたプログラムは一定程度の効果を挙げたと言える。とりわけ、人の行動を客観的に捉える見方を養ったこと、観察の多様性を理解することを修得したことは、さまざまな観察に役立つと思われる。この意味でDVD機能の備ったパソコンは行動観察法の習得には適切な機器であり、教育効果の可能性が高いといえよう。

この授業の次の段階としては、実際場面の観察技能を習熟する機会を受講生に提供すること、その際、臨床心理学、社会心理学の領域等、より広い応用ができる形への発展が必要であろう。

また映像分析という面からみると、ビデオ・ドキュメンテーション技法の習得に应用可能であろう。ビデオ・ドキュメンテーションは、学校等の教育場面、運動トレーニング、病院や施設などでの医療、福祉、療育の実践等さまざまな場面で取り入れられ、使われている。今後は、大学でもさまざまな場面でビデオ・ドキュメンテーションについての授業が増加していくであろうが、そのような機会にも、本研究で示した映像を使ったプログラムの試みは貢献できると考える。

本研究はそのような最初の試みであり、教材の内容、プログラム、現場観察との繋がりの中で将来開発すべきことや考慮すべきことが多くある。今後の授業のなかで組織的に検討していきたいと考えている。

V. 参考文献

- 中澤潤、大野木裕明、南博文、心理学マニュアル・観察法、北大路書房、1997。
 アンソニー・D・ペリグリーニ、子どもの行動観察、大藪泰他訳、川島書店、2000。